日本医史学雑誌　第 57 巻第 3 号（2011）　325–342

19 世紀ヨーロッパの鍼灸の受容における シーボルトと石坂宗哲の貢献について

――シーボルト旧蔵の鍼灸関係資料の比較調査を中心に――

ヴィグル・マティアス，町　泉寿郎

二松学舎大学

受付：平成 23 年 2 月 7 日／受理：平成 23 年 7 月 22 日

要旨：ヨーロッパにおける東洋医学の受容の上で，シーボルトの貢献は鍼灸医学，特に石坂宗哲の鍼灸を理解することに限られたことが知られている．先行研究では門人がシーボルトにオランダ語訳して提出した文献がシーボルトの鍼灸知識の源泉となったことを明らかにしたが，その石坂宗哲による日本語のオリジナルバージョンの特定については不十分であった．本論文では，ライデン大学図書館，オランダ国立民族学博物館，ボーフムのルール大学，東洋文庫に所蔵されているシーボルト旧蔵の鍼灸資料に基づいて，そのオリジナルバージョンを明らかにした．併せて，シーボルトの石坂宗哲の鍼灸への関心について検討し，彼の日本の鍼灸への関心が，先行するライネとケンペルの鍼灸への関心と違うことについて論じた．

キーワード：鍼灸，ライデン，シーボルト，石坂宗哲，知要一言

1. はじめに

従来のシーボルト（1796～1866, Ph. Fr. von Siebold）研究において，石坂宗哲（1770～1841，江戸後期の幕府鍼科医師）がシーボルトに鍼灸文献を伝えたこと，およびシーボルトの門人が石坂の鍼灸文献について書いたオランダ語訳した論文に関する研究がなかったわけではない．周知の通り，呉秀三の『シーボルト先生―其生涯及功業―』(1926)，入沢達吉監修による『施福多先生文献聚影』(1936) の第 7 冊に収録された「灸法略説」の大鳥蘭三郎による解説，『シーボルト研究』（1938，日独文化協会）などの先行研究がある．

しかしながら，これらの先行研究の問題点は，第一にライデン大学に所蔵されているシーボルト旧蔵資料を参照しておらず，石坂宗哲がシーボルトに伝えた文献が十分に明らかになっていない．そのためにそれから翻訳したシーボルト門人によって書かれたオランダ語論文，さらにそれを基にシーボルトが執筆した論文の比較対照調査も十分行われていない点がある．

そこで本稿では，シーボルトが持ち帰った石坂宗哲の鍼灸文献を検討して，従来分かっていなかった点を明らかにするとともに，シーボルトがなにゆえに鍼灸術の中でも，とりわけ石坂宗哲の鍼灸術に関心を持ったのかという問題を考察して，シーボルトと石坂宗哲の鍼灸をめぐる交流を，19 世紀ヨーロッパの鍼灸の受容の流れの中に位置づけることを目的としたい．

2. ライデン資料を中心としたシーボルト旧蔵の鍼灸関係文献について

シーボルトはオランダ東インド会社の出島商館医員として 1822 年 6 月に来日したが，6 年後の 1828 年 9 月 18 日の帰国準備の際に，収集品の中に幕府禁制の日本地図があったことが発覚し，それが問題になって国外追放処分となった．シーボルトは 1830 年 7 月にオランダに着いた後，早速

オランダの国王ウィレム1世に，日本から持ち帰った収集品を整理して目録を作成するよう命じられた[1]．シーボルトは，帰途のバタヴィアで雇ってオランダへ連れてきた中国人の郭成章と，言語学者のヨーゼフ・ホフマン助手の協力を得ながら，もとの出島商館長ヨハン・コック・ブロムホフと，同副館長ファン・オーフ・フェルメール・フイッシャーの収集文献を加え，収集図書の一部を目録として編集し1845年に刊行した[2]．『フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト蒐集並びにハーグ王立博物館所蔵日本刊本写本目録』[3]がそれで，2部に分かれている．第1部はホフマンによってラテン語で書かれている．先ず本の題名がローマ字で挙げられ，そして括弧の中でその中国語の読み方が書かれてあり，次に題名の翻訳，最後にその著者，出版年，出版地などについての情報が挙げられている．目録の第2部は中国人の郭成章によるラテン語目録の日本語訳であるが，両方の目録を比較すると，郭成章の日本語の目録より，ホフマンによるラテン語の目録の方が正確な場合が多いことが分かる．例えば，『知要一言』の項目を見ると，ラテン語の目録には「497. Tshijô itsigen, Isi saka Sôtets, medici Jedonici dissertatio medica, MS. 1 vol.」（知要一言，石坂宗哲，江戸の医学について医学論，写本，1冊）と書いてあるに対して，日本語の目録には「497. 知要一言，1冊」としか書かれていない．

この目録には全部で603タイトルが収載されているが，著者別をすると，510タイトルはシーボルトコレクション，31タイトルはブロムホフコレクション，62タイトルはフィッシャーコレクションのものである[4]．また，部門別にすると，603タイトルの中で，自然科学は100タイトル，医学書は14タイトルであるが，この2つの部門の文献はすべてシーボルトコレクションである．医学書の14点の中で，7点は鍼灸に関する文献である[5]が，現在6点はライデン大学図書館に所蔵され，1点はオランダ国立民族学博物館に所蔵されている[6]．7点を簡単に紹介しておく．

・刊本『鍼灸抜萃大成』岡本一抱著，7巻（ライデン大学図書館，UB1099）．元禄12年（1699）に京都・勝村治右衛門によって出版された．これ以外の鍼灸書は全て19世紀に著述または出版された新しい書籍である．シーボルトがなぜ，どのように本書を手に入れたか明らかではない．

・刊本『鍼灸広狭神倶集』石坂宗哲校，1巻（ライデン大学図書館，UB1101）．この本は1610年に明・雲棲子がまとめた雲海士流の流儀書に，宗哲が校訂と自説を加えて，文政2年（1819）に江戸の千鍾房蔵版として出版された．ライデン大学図書館蔵本には，附属している書袋にラテン語で，「De Acupunctura, Tractatus autore, amico Sotets」（鍼術，論文，著者，友人宗哲）とペン書きされている．宗哲を友人と記すオランダ東インド会社の医員はシーボルトしかいないと思われ，おそらくシーボルトの自筆であろう．

・刊本『鍼灸説約』石坂宗哲著，1巻（ライデン大学図書館，UB1100）．文化9年に江戸の千鍾房蔵版によって出版された．書袋にラテン語で「Tractatus de moxa」（灸論）と書かれているが，『鍼灸広狭神倶集』の書き入れと比べると，インクの色と筆記体は同じに見えるので，シーボルトの自筆だと思われる．実際この本では宗哲は灸法だけではなく鍼術についても述べているので，シーボルトの誤認がある．なお大英図書館のシーボルトコレクションと，フランス国立図書館のシーボルトコレクションにも本書が各1冊ある[7]．後述の『九鍼略説』には「支那人に見せたる候間，御せん別に上け申候．針灸説約十部[8]」と書いてあるように，シーボルトが石坂宗哲より何冊ももらったと分かるが，他の7冊の所在は不明である．

・刊本『栄衛中経図』石坂宗哲著，2枚（ライデン大学図書館，UB1132）．文政8年に刊行された．この2枚の図は宗哲の孫吉田秀哲によって描かれた人体血管図と石坂宗哲によるその解説である．出典は明記されていないが，1783年に出版されたオランダのヨーハン・パルヘインの『人体解剖学書』を参照して作成されたと考えられている[9]．フランス国立図書館のシーボ

ルトコレクションにも所蔵されている[10].

- 写本『知要一言』石坂宗哲自筆，1巻（ライデン大学図書館，UB1092）．1頁目の扉に日本語で「知要一言　全」とラテン語で「De acupunctura tractatas, au[c]tore, Isisaka Sotets, archiatro caesariano, Jedo, 1826」（鍼術論，著者，石坂宗哲，帝国医長，江戸，1826）と書かれている．扉の下部にも3行目のラテン語が手書きされている．「Quem vero tractatum jam e vernacula reddici au[c]tor solummodo [animae?] versiones quasdam de acupuncturae in corpus humanum actione adjunxit」（しかし現在の論文を母国語から翻訳した．著者は体への鍼術の効果について説明を書いただけである）．この筆記体は前述の2の筆記に似ているので，おそらくシーボルトの書き入れだと思われる[11]．『知要一言』は外題で，内題としては「喎蘭人の針刺の法を問に答ふ」と書いてある．また巻末の石坂の跋文から，文政9年3月15日に江戸で石坂がシーボルトに会って間もなく本書を渡したことが分かる．
- 写本『九鍼畧［略］説』石坂宗哲自筆，1巻（ライデン大学図書館，UB1103）．題名は『九鍼略説』とされているが，実際には「九鍼」「痘瘡麻疹の病源」「灸法略説　附燔針」という3つの内題をもつ3種類の文献を綴じたもの．いくつかの頁の上欄に「autore archiatro Sotets」（著者，医長，宗哲）などのラテン語書入れがある．
- 写本『鍼灸図解』2枚（オランダ国立民族博物館，1-4648a）．現在この経絡図のうちの1枚はライデンのシーボルトハウスに展示されている．

一方，シーボルト旧蔵として知られる鍼灸関係資料のなかで，前述したようにオランダ語で書かれた『灸法略説』という文献の存在が早くから紹介されて知られている．現在，原本はドイツのルール大学ボーフムに所蔵されているが，1934年にベルリン日本学会のシーボルトコレクション300余点が日本に将来された時，本書は撮影され，写真資料として東洋文庫（請求記号：XVII-1-B-6 I-33）・国立公文書館（請求記号：159–0203）に現存している．この文献は，『施福多先生文献聚影』第7冊の解説で大鳥蘭三郎が述べたように，次の4部から成る．このうち，戸塚訳「灸法及び烙鍼法」と石坂宗哲『知要一言』（1826序刊）の灸に関する記述が，また美馬訳と同じ本の鍼に関する記述がほぼ一致することが，明らかにされている．

- 戸塚亮斎訳「灸法及び烙鍼法に関する簡単なる記載」
- 戸塚亮斎訳「小児の痘瘡及び麻疹の原因に就て」
- 美馬順三訳「日本人の鍼術に就て」
- 石井宗謙訳「支那人の鍼術に就て」

各文献の記述内容の比較を見ると，資料間に用語の相違はあるが，内容はほぼ同じである．ボーフム大学『灸法略説』の内容は最も簡略であり，刊本『知要一言』は最も補訂されたものと分かる．『灸法略説』についての先行研究は，『灸法略説』が（刊本の）『知要一言』から翻訳されていると説明するが，ライデン大学『知要一言』には灸法の論文が載せられておらず，『灸法略説』は写本『九鍼略説』と写本『知要一言』からできたものと考えられる[12]．ではライデン大学所蔵『知要一言』が，シーボルトが美馬順三にオランダ語で翻訳してもらった原本であるかと言えば，ライデン大学所蔵『知要一言』は文政9年3月に石坂宗哲から贈られた本であるから，そうではない．オランダ語訳の原本は，文政5年にトゥリングが石坂宗哲から贈られた『知要一言』のバージョンであると考えられる．

3. もう1つのシーボルト旧蔵のオランダ語の鍼灸資料

かつてドイツのルール大学ボーフムに所蔵され，写真資料として東洋文庫にも現存されている（請求記号：XVII-1-B-6 V-8），もう1つのシーボルト旧蔵にかかるオランダ語訳された鍼灸関係資料が残されている[13]．筆者が知る限りでは，現在までのシーボルト研究の中で，引用されたことない資料である．この資料は2枚からなっている．

1枚目の表面には題名として「Einige Bemerkungen über Acupunctur」（鍼術について少数の解説）と書いてあり，1枚目の裏面と2枚の表面は原文であるが，名前やサインなど作成者については何も書かれていない[14]．以下はその原文の日本語訳である．

長い鍼の用途は，水腫の病に腎臓に直接刺して体の下部（腺）を盛にし，痢病に腸を直接刺して不快感を緩くし，黄疸に肝膽の部位に刺す類に用いる．

管を使って鍼を刺しにくい部位には，管なしでも鍼を刺せる．体に直接鍼を刺すとき管は必ずしも要らないが，服の上から鍼を刺す時には，管を使って体に鍼を刺すべきである．

先に述べたように，鍼法には迎・随という2法がある．迎というのは血を排出すること，つまり瀉血の法である．随というのは，細鍼を使う補法である．又補法のうちに迎と随がある．これらの方法は元気な体を障害することなく，どの体部も和緩にする[15]．

この文献を以下のようにABCに分けて，ライデン大学『知要一言』の内容と比較すると，この資料はライデン大学『知要一言』にある追加説明のオランダ語訳であることが明らかである．この追加説明は，文政五年の初稿『知要一言』にはなかった，つまりトゥリングに贈り，後に美馬によってオランダ語訳された時にはなかった内容と考えられる．

（A）長い鍼について

【ベルリン日本学会の鍼術文献】長い鍼の用途は，水腫の病に腎臓に直接刺して体の下部（腺）を盛にし，痢病に腸を直接刺して不快感を緩くし，黄疸に肝膽の部位に刺す類に用いる．

【ボーフム大学の『灸法略説』の第3編】このことに関する記述はない．

【ライデン大学の『知要一言』7丁表・上欄の書入れ】長き鍼の用は，水腫の病に腎蔵をさして下焦（きりいる）を盛にし，痢病に直腸をさして裡ゑ後重を緩くするの類，黄疸に肝膽の部をさすの類に用ゆ．

（B）管鍼について

【ベルリン日本学会の鍼術文献】管を使って鍼を刺しにくい部位には，管なしでも鍼を刺せる．体に直接鍼を刺すとき管は必ずしも要らないが，服の上から鍼を刺す時には，管を使って体に鍼を刺すべきである．

【ボーフム大学の『灸法略説』の第3編】このことに関する記述はない．

【ライデン大学の『知要一言』7丁表・上欄の書入れ】場所により管の用ひにくき所は，管を用ひすして刺す．人の身へじかに刺すには管は大かた不用なり．衣服を隔てその上より刺すには管を用ゆ．

（C）鍼法について

【ベルリン日本学会の鍼術文献】先述べたように，鍼法には迎・随という2法がある．迎というのは血を排出すること，つまり瀉血の法である．随というのは，細鍼を以て補法である．又補法のうちに迎と随がある．これらの方法は元気な体を障害することなく，どの体部も和緩にする．

【ボーフム大学の『灸法略説』の第3編】このことに関する記述はない．

【ライデン大学の『知要一言』九丁表末尾の書入れ】迎随に二法あり．迎て奪といふは，本文のことく瀉血の法なり．随て済といふは，本文のことく細鍼にて補ふの法なり．又補法手術の内に迎と随とあり．精神営衛の道にむかい随ひて，少しも障りとゝかうることなく，鍼さして和緩にするの術，これを迎しこれを随すと云．

以上の明瞭な一致から，このオランダ語訳された鍼術資料が，シーボルトが文政9年に石坂宗哲から『知要一言』を贈られた時，その追加説明に気付いて，初稿になかった分の記述について新たに門人にオランダ語訳させたものであると考えられる．訳者名はないが，表紙に恐らくオランダ語の筆蹟から判断したものと見られる筆者不明の「石井宗謙」の鉛筆書入れがある．この資料からは，シーボルトが石坂宗哲の鍼術に注意深い関心

を払っていることが読み取れる．

4. 鍼灸についてシーボルトが書いた論文

日本についてのシーボルトの最も有名な著作は1832年にドイツ語で出版された『Nippon』である[16]が，その第4章，図V.aには外科道具の図版以外，鍼灸医学についての解説がない[17]．図版の中で，外科の道具の他に打鍼，管鍼，九鍼などが紹介されている．実際，シーボルトが初めて鍼術について論文を書いたのは1833年の『バタヴィア学芸協会雑誌』第14号に載せられた「鍼術について，日本の奥鍼医石坂宗哲の書簡によるもの」である[18]．この論文は2部に分かれていて，第1部は石坂宗哲の論文のオランダ語訳であり，第2部分はシーボルトによるその解説である．また論文の終わりに，鍼術の道具を表す先の『Nippon』の第1版と似通った図版がある．オランダ国立民族学博物館に所蔵されるシーボルトが日本から持ち帰った鍼術道具と比較すると，実際シーボルトは自分自身が収集した鍼術道具から，『Nippon』と『バタヴィア学芸協会雑誌』の図を作成したと判断される[19]．シーボルトが1866年に亡くなった後，その生誕100年を記念して1897年にシーボルトの子息によって出版された『Nippon』第2版の第2巻には，鍼灸についての論文が収録されている[20]．その図版は『Nippon』の第1版と全く同じであるが，論文はシーボルトのノートに基づいて編集された．『Nippon』第2版に載せられている鍼術についての論文の題名は「日本の鍼術知見補遺」であり，灸法の論文の題名は「艾の効用について」である．

大鳥蘭三郎が明らかにしているとおり，『バタヴィア学芸協会雑誌』に載せられた論文の第1部，つまりオランダ語で訳された石坂宗哲の手紙は，用語，文章の構造などの相違があっても美馬順三によってオランダ語で書かれた『灸法略説』の第3編と同じ内容であり，おそらくシーボルトは美馬順三のオランダ語を直して，『バタヴィア学芸協会雑誌』に載せたと考えられる．ただし，『バタヴィア学芸協会雑誌』の論文を『日本』第2版の鍼術論と比較すると，『バタヴィア学芸協会雑誌』論文の第1部は殆どそのまま載せられたが，いくつかの個所に説明が追加されている．『バタヴィア学芸協会雑誌』論文の第2部，つまりシーボルトの解説は追加説明がされずに，そのまま載せられた．

灸法についてシーボルトが書いた論文は，『日本』第2版所収「艾の効用について」しかないが，この論文の内容を検討すると，シーボルトはケンペルの灸法論と[21]，戸塚亮斎によってオランダ語訳された『灸法略説』の第1編と，自分の観察とに基づいて執筆していることが分かる．『Nippon』第2版にも「灸所鑑」は収録され，ケンペル論文からの引用が戸塚亮斎の論文より圧倒的多いことから，この灸法についての論文は，『Nippon』の第1版でシーボルトが使わなかった資料から，子孫が書いたものではないかと考えられる．

5. 石坂宗哲の鍼術へシーボルトの関心について

シーボルトが第1回の来日中（1823～1830）に収集した資料の中で，医学資料が多くないことから，彼の東洋医学への関心が低かったと言われる．例えば，H. ビューケルスは次のように言う．「日本の伝統医学をより深く理解することに，シーボルトがほとんど貢献しなかったのは不思議だ．おそらく彼は，その論理的解釈にあまり関心を持てなかったものと思われる．「日本」でも，伝統的医学理論に触れた記述はまったくないし，シーボルトの蔵書にも，その主題を扱った書物はない．唯一の例外が鍼灸術であった[22]」．

しかし鍼灸術について関心を持ったというよりも，前述したようにシーボルト旧蔵の鍼灸書を見ると，実際には石坂宗哲の鍼灸術に関心を持ったといった方が正しいだろう．では，なぜシーボルトが石坂宗哲の鍼灸に関心を持ったのであろうか．江戸時代に来日した他のヨーロッパ人が日本の鍼灸について書いた紹介論文，あるいは彼らに与えた印象について述べながら，この問題を考えてみたい．

ポルトガル宣教師の観察に基づく『日葡辞書』（1603年出版）の鍼灸に関する見出し項目[23]と，オ

ランダ東インド会社の牧師としてバタヴィアに送られたヘルマン・ブショフが1655年に痛風治療におけるモグサの効能について書いた論文[24]を除けば，オランダ東インド会社の医師として来日し江戸時代の日本の医学を直接観察できた人物で，ヨーロッパに鍼灸を紹介する論文を書いた人物としては，シーボルトの他にウィレム・テン・ライネとエンゲルベルト・ケンペルが有名である[25]．

ライネは1674年から1677年まで長崎に滞在した間，医師岩永宗故と通詞本木庄太夫の協力を得て，鍼灸についての情報を集め，その観察の結果を，1683年に出版した『関節炎論』の中に載せた[26]．論文の中で，ライネは当時広く使われていた打鍼と撚鍼を紹介する他に，鍼灸書としては主に中国宋代の『銅人腧穴鍼灸図経』に基づき，経穴を表す4つの図版を挿入しながら経絡理論を説明している[27]．彼は同時代の多くのヨーロッパ人と同じく，ガレノスの教えと，1628年にウィリアム・ハーヴェーが提唱した血液循環説に目を奪われており，東洋の経絡理論が動脈や静脈や神経に相当すると考えていた．たとえば，経絡とは動脈か静脈であり，体液病理学説にいうところの「humidum radicale」（湿性の根本）と「calidum innatum」（先天性の湿熱）との2種類であると説明し，中国や日本の医学における「気」の概念を，ヒポクラテスの教訓と同一視して，「Flatus」（息[28]）と訳した．そのようにして，東洋医学用語と西洋医学用語を対応させることに配慮したにもかかわらず，ライネはなおも「ヨーロッパの解剖学に優れた人物は，ここに紹介した経絡と経穴を軽視し，経絡図の付録に関するぎこちない紹介を批判するかもしれない[29]」とあらかじめ断りを述べており，経絡理論がヨーロッパの最先端の解剖学の見地から異議の出ることを予想していたと考えられる[30]．興味深いのは，4つの図版では鍼を刺し灸を据えるべき部位を示すと説明されているが，鍼の種類と刺し方などを説明した鍼術の実践の部分では，経絡理論に触れずに痛みのある部位に鍼を刺せばよいと説明している．つまり，頭痛の時は頭に鍼を刺し，腹痛の時は腹に鍼を刺すと説いている．東洋医学の理論に対して疑い深い西欧の医師にとっては，むしろこの説明の方が受け入れやすかったであろうから，ライネはその点に配慮したものと考えられる．ライネは長崎に到着ばかりのころ，1674年10月19日付けのブショフ宛の手紙で日本の鍼灸に関する彼の関心と，灸法に関するブショフからの調査の依頼を明らかに示したにもかかわらず[31]，「言葉半ばの限られた表現だけのオランダ語で，緻密な日本医学理論を説明する[32]」日本人通詞との意思疎通の困難さに言及している[33]．ライネの中国医学に対する能力の限界もあったために，ライネは経絡と体内臓腑・身体部位の関係性，および経絡の循環説などからなる経絡理論について，理論が存在することは認識していたが，その理論を十分理解することはできなかった．そのため，鍼灸医学理論の基礎をヨーロッパに正しく伝えることができなかった．

ケンペルはライネの来日の約10年後に長崎に着き，ライネと同じように日本人通詞の能力の限界に対面し，彼らに厳しい評価を下していた．「一般的に言うと，通詞の知識と能力は大したものではなく，使っている言葉［オランダ語］の素晴らしさが分からないで，ただ単に知っている言葉を自分の言葉と同じ順番で並べて話しているだけである．通詞の言っていることを理解するのに，もう一人別の通詞が必要なほどである[34]．」それにもかかわらず，1690年から1692年までの日本滞在中に，ケンペルが収集した情報量は驚くべきものである．周知のとおり，日本の鍼灸についてのケンペルの論文は1694年に初めて彼の博士論文である『異国的な10の観察に関する医学卒業論文』の中に発表され[35]，1712年にラテン語で出版された『廻国奇観』と[36]，ケンペルの死後11年に英語で出版された彼の最も有名な著作である『日本誌』にも付録されている[37]．

ケンペルとライネの論文を比較すると，彼らの鍼灸に対する態度がかなり違っていたことが分かる．先ず，ケンペルは鍼よりも灸法に重点を置いている．「鍼法による日本における疝気の治療」という鍼法について詳細に記述しているが，主に疝気治療に限定しており，ライネのように経絡理論を取り入れようとはしていない．一方，灸法につ

いては詳細に記述されている上に，日本の灸書「灸所鑑」からの図版付きの翻訳もあり[38]，ヨモギの葉の摘み取り方法から身体の上に灸をすえるまで，灸法のすべてにわたって説明している[39]．さらに言えば，鍼灸治療の記述について彼らが採った様式や雰囲気が異なっている．ライネは日本の鍼灸について極めて強い関心を持ち，ヨーロッパ医学を柱にして中国・日本の理論を理解しようとしたが，ケンペルはもっと中立的で，むしろ時に疑い深かったと言える．ケンペルの論文の中では，論理よりも技術に重点が置かれていて，理解できたことのみを書いているという印象を読者に与える．鍼を刺す部位については，経絡や経穴という複雑な論理を説明する代わりに，ケンペルは日本には「tensasi」（点刺）と言って鍼を刺すべき場所を探す職業の人がいるということのみ述べている[40]．ケンペルはこれらの技術の効果を証明するために，ライネのように教訓や伝統に基づく体系的な説明に頼ることもほとんどなかった．ヒポクラテスには一度しか言及されていないし，日本古代の治療方について説明するのはただ東洋での伝統の重要性を主張するためであり，ライネが説明したように何世紀もの伝統に基づく理論の明白さと有効さをヨーロッパ人に証明するためではない．鍼を刺す部位について，特に疝気の治療では，ケンペルは徳本流の鍼法だと思われる[41]，腹部に平行四辺形に配置されている九つにツボに鍼を打つという方法を述べている．

要するに，17世紀後半のライネとケンペルの来日時代には，中国と日本の鍼灸書を日本の通詞の説明によって理解するにはまだ言語レベルでの障害が大きかったし，一方では例えば『十四経発揮』の和刻回数が示すように経絡理論が十分に浸透した当時の日本において，解剖医学を基盤とする彼らヨーロッパ人医師に，西洋医学と対応していない鍼灸術の理論を理解することは，大きな困難があった．ライネとケンペルの他に，1775年から1776年まで日本に滞在したカール・ペーター・ツンベルクの著作も有名であるが，その中で日本医学に関する章は数ページという短いものであり，ライネやケンペルと比較すると，彼は日本医学にほとんど興味がないように思われる．しかも鍼灸医学に関する彼の説明は彼自身の研究ではなく，主にケンペルの説がもとになっている．特に注脚を見ると，ケンペルの研究から引用され，典拠を明らかにしている[42]．さらに，オランダ人のイサーク・ティチング（Isaac Titsingh）は1779年から1784年までの日本滞在から，鍼灸医学について資料と物を残した[43]が，『鍼灸極秘伝』のオランダ訳以外には，彼の日本鍼灸医学についてのノートが当時のヨーロッパ人にほとんど知られておらず，影響がなかった[44]．

シーボルトは，来日以前にライネやケンペルの日本に関する報告を知っている．したがって，彼の鍼灸への関心は100年以上前のライネやケンペルのような，ヨーロッパで知られていない治療方法に対する異国情緒的な関心ではなく，その具体的な施術方法や理論にあったと考えられる．その中でも，彼は幕府鍼科医官の石坂宗哲の鍼灸術に限って強い関心を持った．それは石坂の鍼灸理論が，伝統的な鍼灸医学理論である経絡理論に基づかない点に，注目したと考えることができる．

石坂宗哲は一般に，漢方・蘭方の折衷によって鍼灸の近代化に端緒を開いた人物として知られている[45]．その著書『医源』に見えるように，一方で中国医学理論の中核というべき「黄帝内経」の信奉者である宗哲は，『難経』と『脈経』の説を誤りとして批判し，その論拠を西洋医学に求めて，西洋医学に言うところの「神経」「動脈」「静脈」を，「内経」の「宗気」「栄」「衛」に訳すること等によって，オランダ医学の解剖学を援用しながら，新しい鍼灸医学観を構築した[46]．つまり，宗哲は西洋医学，とりわけ解剖学によって，「黄帝内経」の経文を空理空論から救い，臨床に役立たせようとする態度を示した．ライデンのシーボルト旧蔵の『知要一言』にも，宗哲が受けた解剖医学の影響が見られる．例えば，鍼で刺すべき場所について，宗哲は病気のある時に体のどこでも刺せるが，病気がなければ，健康な人体には鍼を刺してはいけないと説明する（「人の身にはりさす場所，あまたあれとも，その大凡を語らんに，人々病あらは，頭より足にいたる迄，皆はり刺す

へき場所なり．若病のなからんには，皆鍼を禁すへし[47]」)．つまり，ここでは，宗哲が一般の鍼灸書の中で説明されている禁鍼穴・禁灸穴などを批判している．また鍼術の動作について，宗哲は次ぎのように説明する．

> 鍼の病を治する訳を知らされは，鍼法死物となり，活用する事なし．よく其活用するの訣を知る時は，雪汚解結(けかれをすすきむすほれをとく)の術，一言にして尽すへし．扨その要をいはんに，竹木のとけの，身にたちたるも，金銀鉄のはりかねの，身にたちたるも，同くとけなり．唯誤りて立つと，術ありてさしたるとの相違なるのみ．竹木のとけ立ちたるは，人力の及ふたけは，抜き去るへし．深く入て，人力にて抜けされは，其人の自然の生気を以て，先つ熱をそのとけのある所に生し，生気血脈，そのとけのある所に集りて，いよゝゝ熱し，その熱のために，腐れて膿となり，人力に抜ぬとけ，膿と共に潰て，身外に抜け出るなり．膿出て熱除(さり)て，元の無底の身となるか如し．術を以て，金銀鉄のはりを，病ある所にさし入れは，竹木のとけの入りある所に，熱を生するか如く，生気血脈か鍼の下に集り来るなり．暫く鍼を留め，ほと宜(よろ)しく，元気を集めて，その鍼を抜き去れは，集りたる元気にて，病邪を駆散して，忽に消除(なをる)するなり．故に古き書にも，病ひ十日なれは三度さして愈ゆ．多少遠近は，此数を以ておすへしとあり．是邪のある所に鍼をさし，邪を増して，元気に力を入させ，鍼を抜き去りて，力を入れ集りし元気を以，邪を除き去るの術なり．乃ち人葠附子峻烈の薬を以て，衰弱の元気を引き起し，怒張するも，同し術と心得へし[48]．

宗哲によると，病気がある時に的確な箇所に鍼を刺せば，その刺された所に反応が現れ，元気が集まることによって，「病邪」が除かれる．言い換えれば，宗哲の鍼術とは経絡理論に基づかず，疼痛局所に近い考えである．しかし，シーボルトが自分自身で体験した鍼術の観察によれば，この説明を完全に認めることはできなかった．『バタヴィア学芸協会雑誌』第14号に出版された鍼術について石坂宗哲の手紙の終わりに，シーボルトは自分の体験について次ぎのように言う．

> 私が私自身に行った試みによると，注意深い鍼はほとんどまったく痛みを起こさず，炎症も他の症状もひき起こさなかった[49]．

鍼術を体験した時，シーボルトは宗哲が説明した体の刺された箇所の炎症的な作用を全く感じなかった．そこで，シーボルトは石坂宗哲の説明を踏まえ，郷里のドイツ・ビュルツブルク大学で医学を教わった師であるイグナツ・デリンガー教授の研究観察によって，血液循環に基づく鍼灸の作用についての新しい理論を立てたと考えることができる．

> 鍼の病の有機体への作用については，私の研究（動物の血液循環について）によれば，それは各々の局部的な刺激と同じであるとしか言えない．烙鍼法を行うと，血が鍼の行われた身体の個所へ向かって流れることによって，血液循環の変化が生じる．
>
> それは鍼を刺すことによって，最も繊細な個所に突きあてられて生ずる神経の一連の作用である．
>
> 注記：鶏の胎生中における冠状動脈 vena coronaria の破損について，私はデリンガー（ミュンヘンの上級医事顧問官）とともに研究し，顕微鏡でこのような変化を明らかに確認させられた．
>
> 熱い気候のもとで行われた私の観察もまた，私を納得させてくれた．その観察は次のようなものである．そこで生じる病の多くは，血液が病に見舞われた器官に一杯になり，そこから同じ重さだけ持ってくるという点で，似たような異常なふるまいを血液が示すことに帰せられる[50]．

シーボルトが自己の体験から判断したところでは，鍼術の効果は体の刺された箇所の炎症的な反応によるものではなく，鍼を刺すことによって血液の流れに変化が生ずることによるのである．要

するに，シーボルトが石坂宗哲の鍼術に関心を持った理由は，石坂の鍼術の作用についての理論が伝統的医学理論，つまり経絡理論に基づかず，西洋医学の解剖学を援用した独特のものであることにあり，それはまたシーボルト自身が医学生時代に動物に行った血液の循環に関する実験結果と近い性質を持つものと考えられたからである．

しかし，鍼灸について言えば，ライネやケンペルによる17世紀のオランダ東インド会社の観察よりも，シーボルトの論文はヨーロッパの中であまり影響がなかった．特にフランスの場合で言えば，18世紀末から19世紀前半にかけてフランスでは同時代のヨーロッパの中でも鍼術への関心が高く，極めて多くの鍼術に関する書籍が刊行されているが，1784年から1850年の間，すなわち鍼術に関する論文の数によってフランスの医師が最も熱心であった時期に，最も頻繁に引用されている著者は，ライネ（14回），ケンペル（13回）とティチング（4回）であり，シーボルトの論文や著作は1回も引用されていない．むろん，鍼術に関するシーボルトの論文は初めて1833年に出版されたので，それ以前引用されていないのは当然であるが，調査を1900年に広げても彼の研究は全く参照されていない．その主な理由としては，『バタヴィア学芸協会雑誌』に掲載された論文はオランダ語のみで書かれ，日本の門人によって作成された『灸法略説』は出版されることなく，先述したように1832年初版のシーボルト『日本』では解説なしで鍼術具の図版のみが載せられ，1897年に『日本』第2版で初めて鍼灸に関するシーボルトの論文が広く知られたが，その時にはすでに19世紀ヨーロッパにおける鍼灸のブームが終っていた．

1840年代に入ると，フランスでは医師の乱用によって，鍼術は本来の意義から離れたものになっており，治療効果があってもフランスの医師がその理由を説明できなかったので，より確実な結果を得る新しい治療法が生まれた後，鍼術による治療は衰退し，そして全く簡単に見捨てられた．その後，経絡について初めて正しく説明し，鍼術が痛みのある部分への刺鍼であるとひと括りにできないことを示した，ダブリ・デ・ティエルサン（Dabry de Thiersant）の著書「La médecine chez les Chinois」（中国の医学）が，1863年に出版された[51]が，ほとんど反響がなく，フランスでの鍼術の人気を復活させることはできなかった．鍼術はひどく信用を失っており，フランス人医師が1930年から再び鍼術に興味を持ち始めるには，中国に滞在し，鍼灸医学を再伝播したジョルジュ・スリエ・デ・モラン（George Soulié de Morant）の活躍を待たなければならない．

結局，シーボルトは日本に滞在した時に当時の日本の鍼灸医学の一面を代表する石坂宗哲との交流を通じて鍼灸に関する知識を吸収し，それをよく理解できた人物であったが，彼の鍼灸に関する著作は，鍼術についてヨーロッパ人の関心が一時的に消えた間に，情報源が日本から中国に代わるという過度期に巻き込まれ，ヨーロッパに影響を及ぼさなかったものと見ることができる．

付　録

以下に鍼灸に関するシーボルト旧蔵の各文献の記述内容を比較対照した．比較対照する資料は，ボーフム大学『灸法略説』，ライデン大学『九鍼略説』，ライデン大学『知要一言』，刊本『知要一言』である．『灸法略説』はオランダ語で書いてあるので，大鳥蘭三郎による日本語訳を使用した．ライデン大学『知要一言』には「灸法」と「九鍼」の論文がなく，刊本『知要一言』には「九鍼」の論文がない．したがって，表1では「灸法」の論文と『九鍼略説』の内容を比較し，併せて刊本『知要一言』を対照した．表2では「鍼術」の論文とライデン大学『知要一言』の内容を比較し，併せて版本『知要一言』を対照した．表3では「九鍼」の論文とライデン大学『九鍼略説』を比較した．表現に相違がある場合は下線を施した．ボーフム大学『灸法略説』とライデン大学『九鍼略説』には，小児の痘瘡と麻疹についての論文があるが，鍼灸に関係しないので，比較対照しなかった．

表1

ルール大学ボーフムの『灸法略説』	ライデン大学の『九針略説』	版本『知要一言』	『手沢之内』
灸法及び烙針法に関する簡単なる記載	灸法略説　附燔針		灸法
(A)灸法は支那の古書に出て、次の点に関して用いられている。 （1）動くべき動脈が絶えて動かずになったものを動かす。 （2）大いに動くべき動脈が細微になったものを盛んにする。灸の数は三―七壮に限られている。皮膚の表面の病、細管のつまりに用ひて功果がある。又浅い所の痛みを治するに用ふる。古代の支那人間では灸をすえる場所を三百六十五ヶ所定めてあった。これは、古への聖人が神経や他の脈管が集る所をとつてかく定めたのであるが、後世に至り、この所は誤っておるといわれている。それ故に、今だにこの法によって鍼灸を行っている支那では、この両術が段々と廃れて来た。神経其他の脈管の集る所がよく病に犯される所であるからその点に灸をして、始めてその効があるのであるということを知らなければならない。又むし薬をつよく火にて直に焼と心得へし。	(A)灸は唐山の古書に出て、第一は一身の動脈の動くへき所に絶て動かす、又は大に動くへき所細小に動く等に用ゆる治法なり。其数三七壮にかきる。皆皮膚上の病、精神営衛の細絡繊條のつまりたる、あるひは結れたる、或は塞りたる、或は閉たるに、或は衰弱したるに用ゆ。功を得ること多し。又浅き痛みに、いつれの場所にても用ゆ。唐山にては、人身三百六十五穴なといゝて、針灸のめ当とす。皆古人の精神営衛の集る所を命して穴所とし、夫々にフチヨウの如く名を附しものなり。後世に至り誤り多くなりたれとも、唐山にては今に用ひて此穴此病を愈と思ふゆゑ、針灸とも廃れたりと覚ゆ。扨精神営衛の集る所は、則邪気の附く門戸なれは、其邪気のある所、皮膚の寒温滑濇をよく察して、その人の苦む所に灸するなり。むし薬をつよく火にて直に焼くと心得へし。燔針・焼針・火針は筋部を治し、灸は皮膚の部を治するの術なり。灸炷の大小は、その人老少盛衰に順て製すへし。	(A)灸も唐山の古書に出て、第一は一身の動脈の動くへき所絶て動かす、或大に動くへき所の細微に動く等に用ゆる治法なり。其数三七壮にかきる。皆皮膚上の病ひ、精神営衛の細絡繊絡のつまりたる、結ほれたる、塞かりたる、閉たる、衰弱したるに用ゆ。功を得ること多し。故に浅きいたみには、いつれの場所にても用ゆへし。唐山にて、人身三百六十五穴なといゝて、針灸の目当とす。皆古人精神営衛の集る所を命して穴所とし、夫々符てふのことく名をつけしもの也。後世に至り誤りおほくなりたれとも、唐山にては今に用ひて此穴此病を愈すと思ふゆへ、針の術も灸の法も共にすたれる様におほゆ。偖精神営衛の集る所は、則邪気の入る門戸なれは、其邪気のある所、皮膚の寒温滑濇を能察して、其人の苦む所に灸するなり。むし薬をつよく火にて直に焼と心得へし。燔針・焼針・火針は筋の部を治し、灸は皮膚湊理の部を治する法也。灸炷の大小は、その人老少盛衰に順て製すへし。	(A)灸は唐山の古書に出て、第一は一身の動脈の動くへき所に絶て動かす、又は大に動くへき所細小に動く等に用ゆる治法なり。其数三七壮にかきる。皆皮膚上の病、精神営衛の細絡繊條のつまりたる、或は結れたる、或は塞りたる、或は閉たるに、或は衰弱したるに用ゆ。功を得ること多し。又浅き痛みに、いつれの場所にても用ゆ。唐山にては、人身三百六十五穴なといゝて、針灸のめ当てとす。皆古人の精神営衛の集る所を命して穴所とし、夫々にフチヨウの如く名を附しものなり。後世に至り誤り多くなりたれとも、唐山にては今に用ひて此穴此病を愈と思ふゆゑ、針灸とも廃れたりと覚ゆ。扨精神営衛の集る所は、則邪気の附く門戸なれは、其邪気のある所、皮膚の寒温滑濇をよく察して、その人の苦む所に灸するなり。むし薬をつよく火にて直に焼くと心得へし。燔針・焼針・火針は筋部を治し、灸は皮膚の部を治するの術なり。灸炷の大小は、その人老少盛衰に順て製すへし。
(B)燔針、焼針、火針といわれるものが古代にあった。このものは筋の病を治すに用ひられ、灸法は外部の病を治するに用ひられた。昔、治療に用ひた燔針は普通に家事に使う火箸と似ている。その用法は、患部で病気の深さをよく見定めた上で、或は深く或は浅く、針をさすのであるといふことを心得なければならない。	(B)古は燔針・焼針・火針とて、今の用ゆる細き火箸のことくなる針を鉄にて作り、火にて赤くなるまて焼き、病の筋につきて痛み去りかたきに用ゆるなり。先つ用ゆるまへに、深浅を見きりて定め、深くも浅くも病所を早わさに刺なり。此術、内蔵の諸器にあらす、唯筋にある病治し難きに用ゆ。此治方、唐山の古書には右のことくあれとも、千餘年用ゆる事なし。	(B)いにしへ燔針・焼針・火針とて、今の用ゆる細き火箸のことくなるを鉄にて作り、火にて赤くなるまて焼、病の筋につきてしひれ痛みおほえなき等に用ゆ。まつ用ゆるまへに、浅深をよく見きりて、深くも浅くもさすなり。此術、唐山の古書には右のことくあれとも、絶て用ゆる者なし。	(B)古は燔針・焼針・火針とて、今の用ゆる細き火箸のことくなる針を鉄にて作り、火にて赤くなるまて焼き、病の筋につきて痛み去りかたきに用ゆるなり。先つ用ゆるまへに、深浅を見きりて定め、深くも浅くも病所を早わさに刺なり。此術、内蔵の諸器にあらす、唯筋にある病の治し難きに用ゆ。此治方、唐山の古書には右のことくあれとも、千餘年用ゆる事なし。
(C)現在の実例駿河国に住む鍛冶匠が、長年腹痛を患つていた。種々の治療を試みたが効能がないために、斯様な痛みをして生き永らへるよりむしろ死んだ方がよいと決心して、火箸を焼いて腹につみさした処、その積年の病が立所に癒った。此偶然の治癒は燔針の治法と一致したのである。 石坂宗哲しるす 戸塚亮齋　日本語より翻訳	(C)余嘗て甲州の針科教諭にてありし時、駿州鍛治職人の多年腹痛を患いて、種々の治療を受たれとも治しかたきにあきれ、自殺と決定し、火箸を焼き痛所に刺し通したるに、積年の痛み頓に愈しとなり。古への燔針に自然に当りたるならん。	(C)予むかし甲州の針科教諭にて有し時、駿河国府中の鍛治町のものゝはなしに聞り。何某といへる鍛冶の多年腹痛を患て、種々の治療を受たれとも、治しかたきにあきれて、自殺せんと決定して、火箸をあかく焼、痛所にさしとをしたるに、積年のいたみ立所に愈しとなり。これいにしへの燔針に自然と叶たるならむ。	(C)余嘗て甲州の針科教諭にてありし時、駿州鍛治町のものゝ噺に聞く事あり。何某といへ鍛冶職人の多年腹痛を患いて、種々の治療を受たれとも治しかたきにあきれ、自殺と決定し、火箸を焼き痛所に刺し通したるに、積年の痛み頓に愈しとなり。古への燔針に自然に当りたるならん。

表2

	喎蘭人の針刺の法を問に答ふ	知要一言	喎蘭人の針刺の法を問に答ふ
(A)鍼術は病を治す為に人身に針をさす術である。この術は支那に於いて、二千五百年前に始まり、日本に伝わったのは、約千五百年前である。古代のそのままの法は支那に於いても日本に於いてもいつか絶て、今残っている法はその変法である。	文政壬午、春二月、西洋人江戸に来て貢す。其医未由拉釐吉、医官某を价して曰、本国微針の法ある事なし。若吝まさるか如くは、その大略を聞く事を得は、幸甚ならんと。余答いわく、東西洋を異にし、言語不通といへとも、面語にあらされは、大略も諭しかたからん。官に申て後、ゆひて教へしと云。亦乞て日、始て未嘗なきの法術を開く、軽き事にあらす。本国の師家へ申遣したる上ならては、いよゝゝ行れんと云事も、定めかたし。官に申願ひたる上は、是非行れさる事を得す。亦当年の期を失ふ事を恐るゝなり。唯その大略を聞んことを願ふとなり。拠て、此書を門人に嘱し、訳官作三郎なるものに附し、且門人をして、手術を西洋人の目前に行はせ、その法ある事を知らしむ。訳官此書を西洋人に通辯し、崎陽へ持帰り、彼国の文字に書かへ、渡し遣すへきよし、願ふに付、訳し易からん様に、鄙俚の言葉を以て、書すと云。	文政壬午の春二月、西洋人江戸に来り貢す。其医的由児里旡吉といふもの、医官某を价して曰く、本国微針の法有ことなし。若吝まさるかこときは、其大略を教給はゝ、幸甚なりと。予答て曰、東西洋を異にし、言語不通といへとも、面語にあらすんは、大略もさとしかたからん。官に申て後に、行て教へし。亦乞て日、始て未嘗なき法術を開く、軽きことにあらす。本国の師家へ申遣したる上ならては、いよゝゝ行はれんも計りかたし。官に申願ひたる上は、是非行れさる事を得す。亦当年の期をうしなふことを恐る。唯其大略を教へ給へといふにより、此書を訳官作三郎に嘱し、且門人に命して、手術を西洋人の目前に行はせ、其法あることを知らしむ。訳官、此書を彼国の文字に書かへ、わたすへきよし申に付、鄙俚の言葉をもて訳し易からむ為に書と云。	文政壬子春二月、西洋人江戸に来て貢す。其医的由児里旡吉なるもの、医官某を价して曰、本国微針の法あることなし。若し吝まさるか如くは、その大略を聞く事を得は、幸甚ならんと。余答いわく、東西洋を異にし、言語通せすといへとも、面語にあらされは、その大略も諭かたからん。官に申て後、ゆひて教ゆへしと。亦乞日、始て未嘗なきの法術を開く、軽きことにあらす。本国の師家へ申遣したる上ならては、弥行れんと云事も、定めかたし。官に申願たる上は、是非行れさる事を得す。亦当年の期を失ふ事を恐るゝなり。唯その大略を聞んことを願ふとなり。拠て、此書を門人に嘱し、訳官作三郎なるものに附し、且門人をして、手術を西洋人の目前に行はせ、その法ある事を知らしむ。訳官此書を西洋人に通辯し、崎陽へ持帰り、彼国の文字に書かへ、渡し遣すへきよし願ふに付、訳しやすからん様に、鄙俚のこと葉を以て、その大略を書と云。
(B)その中にも、私は二十年この方、欧羅巴の解剖学を学び、傍支那の鍼術に関する書を読んだ唯一の者であることを思ふ時微笑を禁じ得ないものであるが、その書は今日も尚存しており、原法と比較し、その法を知ることが出来るのであるが、針刺の法を志す者欧羅巴洲に於ける内科学、外科学の如く解剖学に通じねばならないことをここで私は希望する	(B)曰、解剖して、人身内外を委敷知るは、其国の専務と承る。針刺の法を行ふも、人身内外の諸器官能を委く知らされは、病を治するの工夫を得る事なし。徒に師伝を守るのみなり。	(B)曰、解剖して人身内外を委しく知るは、其国の専務ときく。針刺の法を行ふも、人身内外の諸器官能をくはしく知らされは、病を治る工夫を得ることなく、いたつらに師伝をまもるのみなり。	(B)曰、解剖して、人身内外を委敷知るは、その国の専務と承る。針刺の法を行ふにも、人身内外の諸器官能を委く知らされは、病を治するの工夫を得ることを得ることなく、徒に師伝を守るのみなり。
(C)次に、針を刺すべき場所と、その刺し方につき簡単に述べよう。人身に針をさすべき場所鵜は定ってをるが、広く言って、病のある所はどこでも刺してよいが、病がない所はこれを禁ずる。この事は眼科医が非常に大事な所である眼に手術をして効果を挙げる技を見れば分かる如くである。	(A)一、微針の道、唐山二千年余のいにしへに始り、本朝へ伝りても、千余年にも及ふへし。唐山も上古の法は、いつか絶て、今は中古の法のみ残れりと聞。本朝に渡りてある、唐山の古書のうちに、上古の針法存しある事を見出し、唐山二千年の古へにさかのほり、微針の法術を、今日に用ゆる事を得たるは、全く西洋解剖の書によりて、惑を解しと覚ゆ。	(A)一、微針の道、唐山の上古に始り、生る人は度量してその病の有所をしり、死るときは解剖して其病の源由を見るとあり。皇朝へ伝りても、千五百年にも及ふへし。唐山も皇朝も、上古の法はいつしか絶て、今は中古の法のみ残れり。皇朝に渡りてある、唐山の古書をよみ、上古の針法存しある事を見出し、唐山二千年の古へに溯り、微針の法術を今日に用ゆることをえたるは、西洋解剖の書によりて、惑を解しとおほゆ。	(A)一、微針の道、唐山二千年余の古に始り、本朝へ伝りても、千余年にも及ふへし。唐山も上古の法は、いつか絶て、今は中古の法のみ残れりと聞。本朝に渡りてある、唐山の古書のうちに、上古の針法存しある事を見出し、唐山二千年の古へにさかのほり、微針の法術を、今日に用ゆることを得たるは、全く西洋解剖の書によりて、惑を解しと覚ゆ。
(D)針をさすのを禁ずべき所は、肺と心臓及び動脈、神経の大幹とを容れる胸部である。	一、人の身にはりさす場所、あまたあれとも、その大凡を語らんに、人々病あらは、頭より足にいたる迄、皆はり刺すへき場所なり。若病のなからんには、皆針を禁すへし。譬は瞳ほと大事の場所はなけれとも、朧眼には、針をさすか如し。左すれは病のある所は、いか様の場所にても、禁する事なくてよし。	一、人の身に針さす場所、数多あれとも、其大凡をかたらんに、人々病あらは、頭より足に至るまて、皆針さすへき場所也。若病ひなからんには、皆針を禁すへし。たとへは瞳ほと大事の場所はなけれとも、朧眼には針を刺かことし。左すれは病の有所は、いかやうの場所にても、禁するにをよはす。	一、人の身に針刺場所、あまたあれとも、その大凡を語らんに、人々病あらは、頭より足にいたる迄、皆はり刺すへきの場所なり。もし病のなからんには、皆針を禁すへし。譬は瞳ほと大事の場所はなけれとも、朧眼に瞳へ針をさすか如し。左すれは病のある所は、いか様の場所にても、禁することなくてよし。

(E)この術が大なる治効力を有することは、何等の説明を要しないところで、異物が人の體中にあるとき、自分の力でそれを抜くことが出来なければ、生活力（自然の力）を以てその所に炎症を起さしめ、この炎症が遂に化膿して、膿と共に異物がその所より出て、もとの無疵の身體にさす故に、生活力が起って病毒をその所より消し除くのである。	(E)一、針の病を治する訳を知らされは、針法死物となり、活用する事なし。よく其活用するの訣を知る時は、雪汚解結の術、一言にして尽すへし。扨その要をいはんに、竹木のとけの、身にたちたるも、金銀鉄のはりかねの、身にたちたるも、同くとけなり。唯誤りて立つと、術ありてさしたるとの相違なるのみ。竹木のとけ立ちたるは、人力の及ふたけは、抜き去るへし。深く入て、人力にて抜けされは、其人の自然の生気を以て、先つ熱をそのとけのある所に生し、生気血脈、そのとけのある所に集りて、いよゝゝ熱し、その熱のために、腐れて膿となり、人力に抜ぬとけ、膿と共に潰て、身外に抜け出るなり。膿出て熱除て、元の無底の身となるか如し。術を以て、金銀鉄のはりを、病ある所にさし入れは、竹木のとけの入りある所に、熱を生するか如く、生気血脈か針の下に集り来るなり。暫く針を留め、ほと宜しく、元気を集めて、その針を抜き去れは、集りたる元気にて、病邪を駆散して、忽に消除するなり。故に古き書にも、病ひ十日なれは三度さして愈ゆ。多少遠近は、此数を以ておすへしとあり。是邪のある所に針をさし、邪を増して、元気に力を入させ、針を抜き去りて、力を入れ集りし元気を以、邪を除き去るの術なり。乃ち人蔘附子峻烈の薬を以て、衰弱の元気を引き起し、怒張するも、同し術と心得へし。	(E)一、針の病を治する訳を知らされは、針法死物となり、活用する事なし。善その活用するのわけを知る時は、汚たるを雪むすほゝれたるをとくへき術、一言にして尽すへし。偖其要をいはんに、竹木のとけの身に立たるも、金銀鉄の針の身にたちたるも、おなしくとけなり。誤りてたつと、術有て刺との相違あるのみ。竹木のとけ立たらは、人力のをよふたけは、ぬきさるへし。もし人力にてぬけされは、その人の自然の元気を以て、とけの有所に熱を生し、たんゝゝと精神営衛ともに集り、其とけのある所をいよゝゝ熱を盛にし、その熱にて腐れて膿となり、人力に抜ぬとけ、膿とゝもに潰て、身の外にぬけいつる也。膿出て熱除、もとのむきすの身となるかことし。術ありて、金銀鉄のはりかねを、病のある所に刺入れは、竹木のとけの有所に、熱を生するかことく、精神営衛ともに力をいれて針の下に集り来るなり。しはらく針を留め、ほとよく針下に集めて、その針をぬきされは、集りたる精神営衛にて、病邪ををひちらして、忽に消除事、風の雲を吹かことし。古き書にも、病ひ十日なれは三度刺していゆ。多少遠近は、この数を以てをすへしとあり。是邪のある所に針して邪を増せは、精神営衛か其所に力を入れて集るなり。程よく集めて針をぬきされは、集りし精神営衛を以、邪気を除きさる術なり。則人参附子峻烈の薬を用ひて、衰弱したる元気を引おこし、怒漲するも、同し術と心得へし。	(E)一、針の病を治するわけを知らされは、針法死物となり、活用する事なし。よくその活用するのわけを知る時は、汚を雪結を解の術、一言にして尽すへし。扨その要をいわんに、竹木のとけの、身に刺したるも、金銀鉄のはりかねの身にたちたるも、同くとけなり。唯誤りて刺と、術ありてさしたるとの相違あるのみ。竹木のとけ刺たるならは、人力の及ふたけは、抜さるへし。深く入りて、人力にて抜けされは、その人の自然の精神血脈をもつて、先つ熱をそのとけの有る所に生し、精神営衛営衛は血脈なり、そのとけのある所に集り去らて、弥熱し、その熱のために、とけの刺たる所腐れて膿となり、人力にて抜さるとけ、膿と共に潰て、身外に出てさる。膿いつれは熱もさりて、元の無きつの身となるかことし。術を以て、金銀鉄の針を、病ある所にさし入れは、竹木の刺し入たる所に熱を生するかことく、生気血脈か針の下に集り来るなり。暫く針を留め、程よろしくして、その針を抜きされは、集りたる精神血脈にて、病邪を駆散して、忽に消除也。故に古き書にも、病一日なれは三度刺て愈、多少遠近は、此数を以ておすへしとあり。是邪のある所に針を刺し、邪を増して、精神血脈に力を入させ、針を抜きさりて、力を入れ集りし精神血脈を以て、邪気を除き去るの術なり。乃ち人蔘附子峻烈の薬を用いて、衰弱の精神を引き起し、努漲するも同しことなり。
(F)針を刺す術に関しては、記し難いのであるが、その内の二三を次ぎに示さう。針より僅かに短かい管をとって、刺さんとする所に置き、その管を通して針をその所の最上部をたたきながら僅かばかり刺し、その後で管を取り去って右手に針を握り、手をたへず休まぬ様に動かし一これを針の呼吸といふ一ながら更に深くさし込む。これに反し手が動く、動かぬ時は針は、死力によって打ち込まれることとなり、種々の害を生ずる因になる。それ故に、術者の経験によりその効能が異なる。例へば病の源と、在所を正確に診察した上で行ひ、常に病のきざしを正しく知らねばならぬからなのである。	(D)一、避て禁すへきの場所は、大に動て止む事なき物あり。心肺の二蔵と、動脈のふとき管なり。然れとも病の急に臨みては、此道に煆煉の者は、禁し避へき所に刺て、大いに功を得る事あり。猶戦の奇を用ゆるか如し。	(D)一、避て禁すへきの場所は、大に動て止む事なき物あり。心肺の二蔵と、動脈のふとき管と宗脈精神の道なりのふとき管となり。種々あやまちを生すへし。ゆへに針科は、営の道筋と宗脈の道筋にくらくては、素人もおなし事なり。つゝしむへし。偖病の急にのそみては、此道によくたんれんのものは、禁し避へき所に刺て、功を得ることあり。猶戦に奇兵を用ゆるか如し。	(D)一、避て禁すへきの場所は、大に動て止むことなき器あり。心肺の二蔵と、営の動と隔膜となり。しかはいへとも病の急なるに臨みては、此道に煆煉のものは、禁し避くへき所にさして、大に功を得る事あり。猶戦の奇兵を用ゆるかことし。
(G)時たま針をさすと、その刺した所より多少離れた所に衝動を感ずることがある。これは神経がそれによって刺戟されて通ずるのであって、例へば足に鍼して、胸其他に、時々痙攣の如く感ずる如きである。	(F)一、針さすの術正手直刺とて、左右の手を正しくして、体をすへ、腰を入れて、腕を軽くし、指さきの自由に働くを、術を得たりとす。ゆへに、古書にも、針を行ふ者は、左りを信すとて、押手の方を心付て、軽重の自由なるやうにするをいへるなり。右手は是を推事を主とるといゝて、針を推し入るゝなり。扨右の手の針を推す指、始終動揺して刺す、是を針お呼吸といふ。針さす指軽く揺きなきときは、死物となり、全身に微動ある活人をさして、針医の手指術なく、死物となるときは、種々の害を生する事あり。ゆへに古き書にも、針を行ふものゝ心得は、深き淵に臨み、貴人に侍座する心持にて、少しの由断なきこそ、第一なりといへり。又手虎を握るか如ともいへり。萬つのあやまりは、皆ゆたんより生すると、知るへし。	(F)一、針刺の術、正手直刺とて、左右の手正しくして、体をすへ腰を入れて、腕を軽くし、指先の自由に働くを術を得たりとす。左の手の塩指と中指との先を揃て針刺すへき場所をゝさへ、軽重の自由になるやうにし、二本の指の間に右の手にて針をもちをし入るゝなり。さて右の針を推手、始終動揺して休まぬやうに心得へし。是を針の呼吸といふ。故に古き書に、右はこれを推事を主とり、左持てこれを禦と云。又針を行ふものは其左りを信すともいへり。針刺手重く揺きなき時は死物となり、全身に微動ある活人を刺して、針医の手死物となることあれは、種々の害を生することあり。慎むへし。故に古書に、針を行ふものゝ心得をいましめて、深き淵に臨み、薄き冰をふみ、貴人の前に侍座し、或手に虎を握るかことしなと、油断のなき様にいへるなり。よろつのあやまりは、皆油断より生すとしるへし。	(F)一、針さすの術正手直刺とて、左右の手を正しくして、体をすへ、腰を入れ、腕を軽くし、指先の自由に働くを、術を得たりと云。ゆへに、古書にも、針を行ふ者は、左を信すとて、押手のかたを心ろ付て、軽重の自由なるやうにするをいへるなり。右の手は是を推事を主とるといへり。針を推し入るゝなり。扨右の手の針を推す指、始終動揺して刺す、是を針の呼吸といふ。針さす指軽く揺き始終止まさるを宝とす。揺き止むときは死物となり、全身に微動ある活人へ刺して、針医の手指死物となるときは、種々の害を生することあり。ゆへに古き書にも、針を行ふものゝ心得を説て、深き淵に臨み、或は貴人に侍座する心持にて、少しのゆたんなきこそ第一なりと云り。又手に虎を握かことしともいへり。萬つのあやまりは、皆ゆたんより生すと知るへし。
(H)針法に二種ある。即ち補と瀉である。微針で行ふ法を補といひ、瀉とは瀉血の一種に過ぎぬものである。	(G)針の通徹事、今さしたる場所より、上下左右につゝき、ひゝく事は常なり。思ひよらぬ所へ、ひゝくことあり。手足のはりの頭面胸背へひゝくの類ひなり。	(G)一、針に響くといふ事あり。今さしたる場所より、上下左右につゝきひゝく事は常なれとも、思ひよらぬ所へ、ひゝくことあり。手足のはりの頭面胸背へひゝく類ひなり。是皆宗脈へひゝくにて、営衛の経絡にてもなし。又筋にてもなきなり。	(G)針の響く事、今さしたる場所より、上下左右につゝき、ひゝくことは常なり。思ひよらぬ所へひゝく事あり。手足の針の頭面胸背へひゝくの類ひなり。
(I)普通に用ひられる針には金と銀と鉄のものがあって、その長さは私の考へでは、日本の三寸より長くてはならないと思ふ。それより長い時には術を行ふことが困難である。	一、よく此術を得たらん上にて、病を療治するは、その人々の器量次第にて、善く工夫して病の源由を知り、痛み苦しむの因をよく察し得たらん人、上工といふへし。	一、よく此術を得たらん上にて、病を療治するは、その人々の器量次第にて、善く二夫して病の源由を知り、痛み苦しむの因をよく察し得たらん人、上工といふへし。	一、よく此術を得たらん上にて、病を療治するは、その人々の器量次第にて、善く工夫して病の源由を察にし、痛み苦しむの因をよくさつし得たらん人、上工といふへし。
(J)ここに針法の大略を述べた。この術が貴下によって欧州へ紹介され、その地の主なる医師がこの術を非難せずに、却って有益と認むる様になることを切に望むでやまない。	(I)一、針を製するに、金銀鉄を用ゆ。針り金の長さ、木邦の曲尺三寸にかきる。過れは針の尖りへ、術を行ふ医の、精力とゝかず、病に益なし。金銀の針、唯金銀斗りにては柔に過るゆへ、剛き質のものをませて製す。製しかた、そのよろしきを得されは、肉中にて折ることあり。長き針の用は、水腫の病に腎蔵をさして下焦を盛にし、痢病に直腸をさして裡急後重を緩くするの類、黄疸に肝膽の部をさすの類に用ゆ。	(I)一、針を製するに、金銀鉄を用ゆ。針金の長さ、木邦の曲尺三寸にかきる。過れは針の尖りへ、術をゝなこふ医者の精力とゝかす、病に益なし。ふとほそは、一はんより七はんにかきるへし。近世針工の、すりおろしとて、本を六七はんにして末を一二はんに細く製するは無稽にて、針を刺にはよろしからむか、病に益なし。図のことし、考ふへし。	(I)一、針を製するに、金銀鉄を用ゆ。はりかねの長さ、木邦の曲尺三寸にかきる。過れは針の尖りへ、術を行ふ医の精力とゞかす、病に益なし。
	一、管針とて、管を用ひ、曲尺の一分斗り、指にて打込なり。凡人の外皮は、痛癢をしらぬものゆへ、その痛癢を知らぬたけは、打込て害なし。是も医の指まかるか、軽率に打込は、つよく痛む事あり。別而ゆたんなく管をきるへし。管にて、外皮を一度にはちききるなり。	一、管針とて図のことく、管を用ひ、曲尺の一分斗打込なり。凡人の外皮は、痛癢をしらぬものゆへ、そのいたみを知らぬたけは、打込て害なし。是も医の指むり有か、そまつに打こめは、痛つよき事あり。是も油断のなす所也。管を用ひすしてさすときは、針先を皮膚にきひしく刺し付、外皮をとをして其上にて術を行ふへし。	一、管針とて、管にて針を打込む事あり。曲尺の一分斗り管の外に出し、指にて打込なり。凡人の外と皮は、痛み癢みをしらぬものゆへ、その痛癢をしらぬたけは、打込て害なし。是も医の指打込むときにまかれは、つよく痛事あり。軽々敷すへからす。

	(H)一、針法に補瀉迎随虚実と云事あり。補と随とは同し法にて、微針にて病人の精神を努張して、病邪を除くなり。瀉と迎とは同し法にて、血脈の瘀滞するものを瀉し去るなり。西洋に針の瀉法ある事、その術至而委敷と覚ゆ。らんせいた三稜針を用ゆへし。虚法は針をすらゝゝ下し、すらゝゝ抜き去る、精神共に盛なる病に用ゆ。実法は手間を取りて、微針をそろそろさし下し、少しも痛みなく、ひゝけもうすきやうにさすなり。邪ありて精神虚乏したる病に用ゆ。或は虚法を用ゆ事あり。亦上に虚法を用ひ、下に実法を用ゆるるい、病の深浅虚実に与りて、針法の深浅虚実あるは、医者の工夫によるへし。	(H)一、針法に補瀉迎随虚実といふ事あり。補は微針にて病人の精神営衛を努張して、病邪を除く法也。瀉は営衛の瘀滞する血を瀉し除く法なり。西洋に針の瀉法あることは兼て聞及ひ、其術至而くはしとおほゆ。らんせつと三稜の針の類を用ゆへし。迎随の法は、補法の術にて、既に針を下したらは、前にいふ所の呼吸と似たる法にて、営衛の往来をよく考、これを迎へこれに随ふこゝろにて、病の結ほれをとくに気をなかく、日のくるゝをしらすなといふたとへのことく、すなをにこたはりなくさすをいふ也。虚法は針をすらゝゝ下し、すらゝゝ抜き、精神営衛ともに盛なる病に用ゆる術なり。実法は迎随の術を用ひ、手間とりて、そろゝゝ針を下し、少しもいたみなく、ひゝきも薄く、針の呼吸も間遠にゆるくすへし。精神営衛の虚乏したるに用ゆ。偖一人の病ひ、或は実法を用ひ或は虚法を用ゆる事あり。亦上に虚法を用ひ、下に実法を用ゆる類、病の深浅虚実によりて、針法の浅深虚実補瀉迎随ありて用ゆるは、医者の工夫によるへし。この術を得たらん上にて病を治療するは、人々の器量次第なれは、人身の内外上下、十二蔵、精神営衛のわけをよくしり、諸病の因をよく探り当て、それゝゝの術を善く工夫して用ひたらん人こそ上工といふへし。針法の大略をはる。	(H)一、針法に補瀉迎随虚実と云事あり。補と随とは同し法なり。微針にて病人の精神を努張して、病邪を除くなり。瀉と迎とは同し法にて、血脈の瘀滞するものを瀉し除き泄すなり。此瀉法は西洋にありて、その術至而委しと聞く。らんせつた三稜針を用ゆ。虚法は針をすらゝゝ下し、すらゝゝ抜き去るなり。精神営衛の盛なるものゝ病に用ゆる術なり。実法は微針にてそろゝゝさし下し、少も痛みなく、ひゝけもうすきやうにさすなり。邪気ありて精神虚乏したる病に用ゆ。亦一人の病、或は実法を用ひ或は虚法を用ゆる事あり。亦上に虚法を用ひ、下に実法を用ゆることあり。病の深浅虚実によりて、針法の深浅虚実あるは、医者の工夫によるへし。
	(J)以上針法の大略なり。針経にいわく、其要を知る者は、一言にして尽す、その要を知らされは、流散きわまりなしと云々。依之（※之に依て）此略書を、知要一言と名く。西洋にて此法此術行はれは、かならす、莫大のよき工夫も出来なん。針法の瀉法は、元より西洋にあるなれは、微針の補法と、虚実の旨を得て、此術西洋の諸国に行はれん事、道の大慶不過之（※之に過きずと）云。文政五年壬午春二月廿五日 日本東都 侍医法眼石坂宗哲源文和識 迎随に二法あり。迎て奪といふは、本文のことく瀉血の法なり。随て済といふは、本文のことく細針にて補ふの法なり。又補法手術の内に迎と随とあり。精神営衛の道にむかい随ひて、少しも障りとゝかうることなく、針さして和緩にするの術、これを迎しこれを随すと云。	(J)以上、針灸の大略也。針経にいはく、其要をしるものは、一言にして尽す。其要をしらされは、流散して極りなしと云々。ゆへに此略書、知要一言となつく。西洋にて此法此術行はれは、かならすよき工夫も出来なん。針法の瀉法は、元より西洋に有なれは、微針の補法と迎随虚実の旨をえて、西洋諸国に行はれむ事、道の大慶これに過すと云。	(J)以上針法の大略なり。針経にいわく、其要を知る者は、一言にして尽す、その要を知らされは、流散窮りなしと云々これによりて、知要一言と名く。西洋にて此法此術行はれは、かならす莫大のよき工夫も出来なん。針法の瀉法は、元より西洋にあるなれは、微針の補法と、虚実の旨を得て、此術西洋の諸国に行はれんこと、道の大慶これに過きずと云。文政五年壬午春二月廿五日　　石坂宗哲
	文政丙戌の春三月十五日、江戸石町長崎屋にて西乙福児的先生に逢ひ面語す。曰く、此書を本国にとゝけしゆへ、来年は渡り来るへし、となり。去る年、的由児里先吉に贈しとき、にはかに写したるゆへ誤りもあらんと、旧稿をとり出し、新に写し校正を加えて、再ひ呈するものなり。西洋に此道行れなは、術の精妙ゆゝ敷に至らん事、指を屈して待へき也。また鄙名の永く朽さるを懌といふ。　「暘州園」「竿斎」		

表 3

ルール大学ボーフムの『灸法略説』	ライデンの『九針略説』
鍼術に関する記載　日本（語）より訳す	九鍼　鍼針同し
支那の周時代に用ひられた針の長さは一尺が今の六寸であることを知らねばならない。	
鑱鍼　長一寸六分、瀉血するに用ふ。	一、鑱鍼　長一寸六分　支那周の世の尺を用ゆへし。周の世の尺は、今の曲尺の六寸餘を一尺とす。下の寸、皆同し。瀉血に用ゆ。
員鍼　長一寸六分、 針の形は卵に似ている。筋に触れ、それをもむに用ふ。	二、員鍼　長一寸六分　針卵のかたちの如し。分肉を揩摩(ナテヽコウ)ことを主とる。
鍉針　この点（註　点とは針をさした後の痕をいふのであらう）はキビ、アワに似ている。長さ三寸、血管の働きを強めるに用ふ。 [九針略説] 鍉(ジ)針　鋒黍粟の鋭(とかり)の如く、長さ三寸半、脈をめくらすことを主とる。	三、鍉(ジ)針　鋒黍粟の鋭(とかり)の如く、長さ三寸半、脈をめくらすことを主とる。
鋒針　この点は三角形である。この針を身體にうつと難治の病を治すること得る。	四、鋒(ホウ)針　三隅(さんくう)を刃(やいは)にす。用ひて痼疾をとる。
鈹針　この点は平剣に似ている。大きな膿？を開くことが出来る。	五、鈹針　末劔(つるきの)鋒(ほ)の如く大膿を取
員(利)針　この点は犢の毛に似て丸く、点状である。體の衰弱の部を治す。	六、員利針　大さ氂のことし。まるくさきとかりて、中身すこし大なり。痺(ヒ)をとる。〇氂、牛の毛なり。痺はしびれいたむ病也。
毫針　今では一番より七番に至る針を用ひている。健康を増進し、神経を刺戟する。	七、毫針　今用ゆる所一はんより七はんに至るの針、営衛を調和(てうくは)し精神を努張することを主とる。
大針　この点は杖の如くである。長さは四寸あり、水を関節の部へ通ぜしめることが出来る。他方、この大針を烙針として使用することもあるが、関節に水を通ぜしめる針と烙針とは異なる。烙針に就いては、既に灸法の所で書いた。	八、大針　一に火針に作る。長さ四寸。大針はとかり杖(つへ)のことく、機関の水を瀉すとあり。機関とは骨節のつかゐ也。機関の水を瀉するといへは、火針とは大に相違せし事なり。火針、焼針、燔は同しことにて、灸法の内に認め置しなり。
長針　長さ七寸、深部の病を除く。古代には 毫針の様な短いのを用ひた。長い針を用ふる時は、手のわざが針の先きまでは及ばぬ故、十分なわけにはいかない。	九、長針　長七寸　遠痺を取る。遠痺は深き病を刺と云ことならん。古へ尺短く、今の毫針の三寸五六分位にて用ひしものと見ゆ。もし寸長きときは、医者の手術針さきまてとゝかす、針鋒肉の中にて薄き膜を破るの力(ちから)なし。
	此間進し申候九針の図説、又その大略を認め上け申候。借用いたし候仰伏血脈の図、扨々くわしき事、感心いたし候。とうそ精神図まて御滞留中瀉（※写）させ申度候。何か同僚とも御徳をしたひ、沢山参りいろゝゝ御尋申上候よし 御教へ被下候よし、悦ひ申候。何卒医者は解剖の学問第一と申事、御教へ下さるへく候。穴賢。 文政丙戌春三月晦日　いし坂宗てつ 嗚蘭国のしいほると先生 支那人に見せたる（ママ）候間、御せん別に上け申候。針灸説約十部

注

1）シーボルトが収集した書籍については，向井晃編．シーボルト収集の和書（付）シーボルト門人蘭語論文目録．新・シーボルト研究I．東京：八坂書房；2003．Brown Yu-Ying. The von Siebold Collection from Tokugawa Japan. British Library Journal. 1976; 2(1): p. 38–55, p. 163–170参照．

2）この目録の作成と内容については，田邊由太郎．シーボルト・コレクション（文献）の現状—オランダ・イギリス・フランス—．参考書誌研究．1981/6; 22: pp. 26–34参照．

3）Von Siebold P. F., Hoffmann J. J. Catalogus librorum et manuscriptorum japonicorum: A Ph. Fr. de Siebold collectorum, annexa enumeratione illorum, qui in museo regio hagano servantur. Lugduni-Batavorum: Apud auctorem. 1845

4）田邊由太郎．シーボルト・コレクション（文献）の現状—オランダ・イギリス・フランス—．参考書誌研究．1981; 22: p. 27

5）鍼灸関係ではない他の医学書の7点は『広参説』，『薬名称呼』，『人面瘡図説』，『解臓図賦』，『和蘭全躯内外分図』，『薬品応手録』，『婦人患病書』である．

6）オランダに所蔵されているシーボルトが収集した資料の所在を確認するには，セルリエ目録とケーレン目録も必要である．Serrurier L. Bibliothèque Japonaise: Catalogue Raisonné des Livres et des Manuscrits Japonais. Leiden: E. J. Brill; 1896. Kerlen H. Catalogue of pre-Meiji Japanese books and maps in public collections in the Netherlands. Netherlands: J C Gieben. 1996

7）フランス国立図書館のシーボルトコレクションについて，Boyer A. Des sources pour l’histoire de la médecine. Paris: Bibliothèque Nationale de France. 2008; pp. 133–134参照．

8）石坂宗哲．九鍼略説．ライデン大学図書館所蔵（請求番号：UB1103）

9）西川輝照．榮衛中経図の展示記録．名古屋大学博物館報告．2005; 21: p. 263

10）フランス国立図書館に所蔵されている『栄衛中経図』はマセ・ミエコによって詳しく検討された．Macé M. The Medicine of Ishizaka Sôtetsu (1770–1841) as cultural Pattern of the Edo Period: Based on the example of Ei e chûkei zu (1825). Studia Humana et Naturalia. Kyoto Prefectural University of Medicine. 1994; 28: pp. 73–90.

11）頁の一番下の右側には自筆のようなサインもあるが，判読しにくい．

12）日独文化協会篇．シーボルト研究．東京：名著刊行会；1979. p. 104–116．施福多先生文献聚影．東京：シーボルト文獻研究室；1936. p. 167

13）この資料は旧ベルリン日本学会がErika Freifrau von Erhard-Sieboldというシーボルトの孫娘エアハルト男爵夫人エリカから購入して所蔵した．第二次世界大戦後はルール大学ボーフムに収蔵された．大井剛．東洋文庫蔵旧ベルリン日本学会シーボルト文献複製の存在様態．東洋文庫書報．2010/3; 41: pp. 1–22

14）題名と原文とでは異なる筆記体で書かれている．また，原文のいくつかの言葉に修正が見られるが，その修正は原文と同じ筆記体に見える．さらにこの資料のファイルには題名と原文の起こしたタイプライターで印字したもう1枚がある．題名には括弧で括って「In V.S’s Handschrift」（フォン・シーボルトの筆記によるもの）との記述が加えられ，原文の最後には「Geschrieven von Ishii Sooken」（石井宗謙によって書かれたもの）の記述が追加されている．おそらく，1935年に上野の東京科学博物館でシーボルト資料展示会が開催された際に，ベルリン日本学会からこの資料が日本に貸された時に，日本人が行った筆記体の調査による判断であると思われる．

15）“Eene lange naald versterkt de onderste deelen van het ligchaam (of klieren) van het ligchaam in de waterzucht, als mem dezelven in de nieren stijkt; en geneest het onaangenaame ge voel van den builkloop, als men in de endendarm steekt; in de geelzucht kan men dezelven in de deelen van de galbroos en de milt gebruikt; enz. In de plaats, vaarin het moeielijk is, dat eene naald door de pijp gebruikt word, kan men haar zonder deze insteeken. Wanneer zij onmiddelijk in het ligchaam steekt word, dan is de pijp onnoedig; naar, steekt men haar over de kleed in het ligchaam, dan kan zij door eene pijp in het ligcham praaten worden. Gelijk boven genoemde vloeit hier ook twee manier voort; naamelijk: 迎随（ゲイズイ） enz, de eerste is een manier van de bloedontlasting als oderlaat; de laaste is die van het versterkende manier van de deelen, met eene kleine naard; ook in deze laatste vinde ゲイ of 迎 en ズイ of 随 zich; deze manieren zijn in het levendige ligchaam geen naadeelig; en maaken alle de deelen zacht.” 東洋文庫（請求番号：XVII I-B 6 V-8）．

16）『Nippon』は本文編と図版編からなり，1832年から1852年にかけて20分冊を13回に分けて出版された．その後，購入者によって製本された『Nippon』の多くは本文編が3冊に，図版編が2冊に製本されている．宮崎克則復．元：シーボルト『Nippon』の配本．九州大学総合研究博物館研究報告．2005; 3: p. 23–105.

17）『Nippon』の第四章は本研究で参考され，ライデン大学図書館に所蔵されている図版の第二冊に相当する．Von Siebold P. F. Nippon: Archiv Zur Beschreibung Von Japan Und Dessen Neben- Und Schutzländern Jezo Mit Den Südlichen Kurilen, Krafto, Kooraï und den Liukiu-Inseln. nach japanischen und europäischen Schriften und eigenen Beobachtungen. Leyden: C. C. van der Hoek; 1832.

18）Von Siebold P. F. Iets over de Acupunctuur (naaldensteekkunde). Verhandelingen van het Bataviaasch Genoots-

chap van der Konsten en Wetenschappen. Batavia: Der Lands Drukkerij; 1833. p. 381–389

19）ライデンのオランダ国立民族学博物館のシーボルトコレクションの中に，打鍼箱，九鍼箱，管鍼箱がある．

20）Von Siebold P. F. Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern Jezo mit den südlichen Kurilen, Sachalin, Korea und den Liukiu-Inseln. Würzburg und Leipzig: Leo Woerl; 1897. p. 78–86

21）ケンペルは，日本から帰った2年後の1694年に，自分の観察に基づく日本の鍼術と灸法についての論文と，「灸所鑑」という灸法に関する日本の資料の翻訳を初めて発表した．その研究はライデン大学の医学部を卒業する際に彼が発表した博士論文である『Disputatio medica inauguralis exhibens decadem observationum exoticarum』（異国的の十の観察について医学卒業論文）の中に含まれている．十の異なる主題を扱ったこの論文は，スウェーデン，イラン，バタヴィア，日本における10年間続いた旅の間に行われた研究の成果であった．これらの論文は1712年に刊行された『Amoenitatum Exoticarum』（廻国奇観）にも載せられており，さらに1727年，ケンペルの死後11年にイギリスで初めて出版された『The History of Japan』（日本誌）と題された日本研究にも付録として載せられている．

22）Beukers H. The mission of Hippocrates in Japan: the contribution of Philipp Franz von Siebold. Amsterdam: Foundation for Four Centuries of Netherlands-Japan Relations; 1998. p. 101

23）『Vocabvlario da Lingoa de Iapam』（日本言語の事典すなわち日葡辞書）には，32,393個の見出しの中で少なくとも30個は鍼灸と経絡論に関する見出しがある．17世紀前半に日本の鍼灸を説明した最も詳しい西洋の著書であるが，「辞書」という性格上，日本の鍼法をヨーロッパに真に知らしめたウィレム・テン・ライネの論文，『De Acupunctura』（鍼法に関して）と同じ影響力を持つことはなかったであろう．宣教師の鍼灸研究については，Michel W. Frühe westliche Beobachtungen zur Akupunktur und Moxibustion. Sudhoffs Archiv. 1994; 77(2): 194–222参照.

24）1世紀ほど前にルイス・フロイスが日本に滞在した時に「botão de fogo」（火のボタン，すなわち灸）を使い，治療をしていたことから，ブショフは灸法を試みた最初のヨーロッパ人とは言えないが，ブショフは少なくとも灸による治療について詳細な記録を書き残した最初のヨーロッパ人であり，また初めて灸を「Moxa」と呼んだ人である．1655年からバタヴィアのオランダ東インド会社で牧師として勤務していたブショフは，問答形式でまとめられた彼の本で，「もぐさ」をどのように使用するか，「もぐさ」の効能，なぜ痛風治療に「もぐさ」が良いかなどについて書き記している．Busschof H. Het Podagra, nader als oyt nagevorst en uytgevonden, midsgaders des selfs sekere Genesingh of ontlastend Hulp-Mittel, Amsterdam: Jacobus de Jonge; 1675. ブショフに関する先行研究については，ヴォルフガング・ミヒェル．ヨーロッパにMoxa（もぐさ）を紹介したバタビアの牧師ヘルマン・ブショフの生涯と著作について．日蘭学会会誌．1998; 23(1): 47–63と，ヴォルフガング・ミヒェル編集．ヘルマン・ブショフ：痛風に関する詳細な研究及びその確実な治療法と効き目のある薬剤について―ヨーロッパにおける弓術に関する初の著書（1675年英文版）．九州大学大学院言語文化研究院叢書（3）．2003参照.

25）魯桂珍，ジョセフ・ニーダム．橋本敬造，宮下三郎（翻訳）．中国のランセット―針灸の歴史と理論．大阪：創元社；1989.

26）Wilhelmi ten Rhyne M. D. &c. ransisalano-Daventriensis Dissertatio de arthritide: Mantissa schematica: De acupunctura: et Orationes tres, I. De chymiae ac botaniae antiquitate & dignitate: II. De physiognomia: III. De monstris / Singula ipsius authoris notis illustrata. Londini: Impensis R. Chiswell; 1683.

27）経穴を表す四つの図はそれぞれ正面と背面から描写された4枚の，いわゆる「仰伏経絡図」をもとにした人体図の2組からなる．ライネは，最初の2枚は「Icon Sinensis」と「Effigies Sinica」つまり中国の図から，次の2枚は「Schema Iaponicum」つまり日本の図を基礎にして描いたということを明確にしている．ライネはこの図のもとになった書名を記さないが，挿図のうちの一つは，原書に「Donyn Jukits Xinkieu Soukio」の付録があったと記している．これに対して，通詞が次のように説明した．「Donynは銅から出来ている人形」，「Jukitsはこのしるしが付いている肢」，「Xinkieuは鍼法と灸法のこと」，「Soukioは証明図という意味である」と．実際，Donynは銅人，Jukitsは腧穴，Xinkieuは鍼灸，Soukioは図経のことである．つまり「銅人腧穴鍼灸図経」，北宋・一一世紀に編纂された王惟一の『銅人腧穴鍼灸図経』のことを示す．Wilhelmi ten Rhyne M. D. &c. ransisalano-Daventriensis Dissertatio de arthritide: Mantissa schematica: De acupunctura: et Orationes tres, I. De chymiae ac botaniae antiquitate & dignitate: II. De physiognomia: III. De monstris / Singula ipsius authoris notis illustrata. Londini: Impensis R. Chiswell; 1683. p. 155, 160, 163, 165.（ライデン大学図書館所蔵，請求番号：625 B 34）.

28）ライネはこの「Flatus」（息），「Nocivos flatus」（邪息）あるいは「Vitiosi flatus」（悪質な息）を病気の原因と見なしている．Wilhelmi ten Rhyne M. D. &c. ransisalano-Daventriensis Dissertatio de arthritide: Mantissa schematica: De acupunctura: et Orationes tres, I. De chymiae ac botaniae antiquitate & dignitate: II. De physiognomia: III. De monstris / Singula ipsius authoris notis illustrata. Lon-

dini: Impensis R. Chiswell; 1683. p.152, 157, 181, 189.（ライデン大学図書館所蔵，請求番号：625 B 34）.

29）Wilhelmi ten Rhyne M.D. &c. ransisalano-Daventriensis Dissertatio de arthritide: Mantissa schematica: De acupunctura: et Orationes tres, I. De chymiae ac botaniae antiquitate & dignitate: II. De physiognomia: III. De monstris / Singula ipsius authoris notis illustrata. Londini: Impensis R. Chiswell; 1683. p.151（ライデン大学図書館所蔵，請求番号：625 B 34）.

30）他の箇所でも，ライネは，この経絡の説明に十分な説得力がないと考えるヨーロッパの読者に対して，自分で鍼灸を体験することを勧めている.「したがって，中国の手の込んだ説明を使用したくない医師は，臨床実験で自分自身の観測を収集させ，その観測の結果を使い，臨床経験をガイドとして重んじながら，省略できる所を修正させる.」Wilhelmi ten Rhyne M.D. &c. ransisalano-Daventriensis Dissertatio de arthritide: Mantissa schematica: De acupunctura: et Orationes tres, I. De chymiae ac botaniae antiquitate & dignitate: II. De physiognomia: III. De monstris / Singula ipsius authoris notis illustrata. Londini: Impensis R. Chiswell; 1683. p.152（ライデン大学図書館所蔵，請求番号：625 B 34）.

31）この手紙は1683年に出版されたライネの論文に載せている. Michel W. Erste Abhandlung über die Moxibustion in Europa: das genau untersuchte und auserfundene Podagra, vermittelst selbst sicher-eigenen Genäsung und erlösenden Hülff-Mittels / Hermann Buschof. Heidelberg: Haug; 1993. p.41

32）Wilhelmi ten Rhyne M.D. &c. ransisalano-Daventriensis Dissertatio de arthritide: Mantissa schematica: De acupunctura: et Orationes tres, I. De chymiae ac botaniae antiquitate & dignitate: II. De physiognomia: III. De monstris / Singula ipsius authoris notis illustrata. Londini: Impensis R. Chiswell; 1683. p.153.（ライデン大学図書館所蔵，請求番号：625 B 34）.

33）日本人との通訳の問題以外，ライネは日本人の医者が自らの国の医学に関して知識を分け合おうとしなかったと訴える．例えば，日本の医者についてライネは次のように言っている.「日本人は嫉妬名人であり，自分の医学の秘伝を特に外国人と分かち合おうとせず，宝もののように本棚に隠していた」. Wilhelmi ten Rhyne M.D. &c. ransisalano-Daventriensis Dissertatio de arthritide: Mantissa schematica: De acupunctura: et Orationes tres, I. De chymiae ac botaniae antiquitate & dignitate: II. De physiognomia: III. De monstris / Singula ipsius authoris notis illustrata. Londini: Impensis R. Chiswell; 1683. p.150.（ライデン大学図書館所蔵，請求番号：625 B 34）.

34）Kaempfer E. The history of Japan [...] together with a description of the Kingdom of Siam / written in High-Dutch by Engelbertus Kæmpfer; and translated from his original manuscript, never before printed by J.G. Scheuchzer, with the life of the author, and an introduction. London: Thomas Woodward and Charles Davis. 1727; 1: 273（国際日本文化研究センター図書館所蔵，請求番号：DS/835/Ka）

35）Kaempfer E. Disputatio Medica Inauguralis, exhibens Decadem Observationum exoticarum a Carolo Drelincourt pro grado doctorali. publico examini subiecit Engelbert Kempfer. L.L. Westph. Lugduni Batavorum: Apud Abraham Elzevier; 22. April 1694

36）Kaempfer E. Amoenitatum Exoticarum Politico-Physico-Medicarum Fasciculi V, Quibus continentur Variae Relationes, Observationes & Descriptiones Rerum Persicarum & Ulterioris Asiae. Lemgoviae: Henri Wilhem Meyer; 1712

37）Kaempfer E. The history of Japan [...] together with a description of the Kingdom of Siam / written in High-Dutch by Engelbertus Kæmpfer; and translated from his original manuscript, never before printed by J.G. Scheuchzer, with the life of the author, and an introduction. London: Thomas Woodward and Charles Davis; 1727.

38）『灸所鑑』には日本人通詞の説明を理解するのにケンペルがぶつかった言語上の困難がよく描かれている．なぜなら，ケンペルは「この図に患部によって燃やしても良い箇所が載せてあり，その箇所の名称も書いた」と説明しているが，中国や日本の鍼灸書に示されている経穴とこれらを比較すると，すべて灸をすえるのが禁止されている箇所だったからである．この点について，ヴォルフガング・ミヒェルがすでに論じている. Michel W. Engelbert Kaempfers merkwürdiger Moxa-Spiegel — wiederholte Lektüre eines deutschen Reisewerks der Barockzeit .Dokufutsu Bungaku Kenkyû. 1983; 33: 185–238

39）灸法について彼の論文の背景には，当時ドイツの学士院で行われていた議論と，バタビア在住の医師・商人アンドレアス・クライヤ（Andreas Cleyer）の存在もある．この点については，Michel W. Matthias Gottfried Purmann（1648–1721）und die Moxibustion. 言語文化論究（九州大学）. 1994; 5: p.69–80と，Michel W. Far Eastern Medicine in Seventeenth and Early Eighteenth Century Germany. 言語文化論究（九州大学）. 2004; 20: p.67–82参照.

40）Kaempfer E. The history of Japan [...] together with a description of the Kingdom of Siam / written in High-Dutch by Engelbertus Kæmpfer; and translated from his original manuscript, never before printed by J.G. Scheuchzer, with the life of the author, and an introduction. London: Thomas Woodward and Charles Davis. 1727; 2（Appendix III）: 31（国際日本文化研究センター図書館所蔵，請求番号：DS/835/Ka）

41）Michel W. Engelbert Kaempfer und die Medizin in Japan. Detelef Haberland（ed.）. Engelbert Kaempfer -Werk und Wirkung. Sttugart: Boethius; 1993. p.248–293

42）Thunberg C.P. Voyages de C.P. Thunberg, au Japon, par

le cap de Bonne-Espérance, les Isles de la Sonde, &c., traduit par L. Langlès. Paris: Chez Benoît Dandré et Chez Garnery. 1796; 2: p. 334–338

43）日本の医学に関するティチングが残した資料と物の目録については，Lequin Frank. A la recherche du Cabinet Titsingh: its history, contents and dispersal, catalogue raisonné of the collection of the founder of European Japanolgy. Canaletto: Alphen Aan Den Rijn. 2003. p. 134–141 参照.

44）ティチングによる『鍼灸極秘伝』のオランダ語訳は出版されずに終わり,「Beschreiving van het naalde steeken ne moxa branden」と題するノートの形で現在パリの医学歯学大学図書館に蔵書されている（請求番号：MS 45）．1815年にフランスの医師ジャン・バティイスト・サランディエールは『鍼灸極秘伝』とそのオランダ語訳を手に入れ，1825年にフランス語版を出版したが，翻訳は本来の意味を失わせるほど原文から離れすぎたので，結局フランス語版は厳しく批判され，鍼灸という異国から来た治療方法を紹介する役割を果たしたにすぎなかった．Sarlandière J. B. Mémoires sur l'électro-puncture, considérée comme moyen nouveau de traiter efficacement la goutte, les rhumatismes et les affections nerveuses, et sur l'emploi du moxa japonais en France, suivis d'un traité de l'acupuncture et du moxa, principaux moyens curatifs chez les peuples de la Chine, de la Corée et du Japon, ornés de figures japonaises. Paris: Chez l'auteur et chez Mlle Delaunay. 1825. サランディエールの翻訳への批判については，Gaultier de Claubry E. Notice sur l'acupuncture. Journal général de médecine, de chirurgie et de pharmacie. Paris: Chez Crouillebois; 1825. p. 124

45）呉秀三．徳川時代の有名な鍼医法眼石坂宗哲．実践医理学．1931; 2 & 3: p. 1–5, p. 355–371．間中喜雄．石坂宗哲の時代と背景．漢方の臨床．1962; 9(11, 12): p. 193–210. Kubota N. Ishizaka Sotetsu: A Misunderstood Genius. Najom. 2008; 15(44): p. 34–38.

46）『医源』には「心蔵出納血脉之謂栄衛．栄動而出．行脉中循循乎．脉脉動而不居也．有経絡別絡孫絡支絡細絡．由内達乎．解剖家目曰動脉者之也．衛不動而入．行脉外．其行有節．亦有経絡別絡孫絡支絡細絡．由外入乎内．解剖家目曰静脉者是也.」と書いてある．石坂宗哲．医源．臨床鍼灸古典全書．東京：オリエント出版社；1990. 16: 427

47）石坂宗哲．知要一言（ライデン大学図書館所蔵：UB1092）

48）石坂宗哲．知要一言（ライデン大学図書館所蔵：UB1092）

49）Von Siebold P. F. Iets over de Acupunctuur (naaldensteekkunde). Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van der Konsten en Wetenschappen. Batavia: Der Lands Drukkerij; 1833. p. 388–389．シーボルトの『日本』の第2版にもある．Von Siebold P. F. Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern Jezo mit den südlichen Kurilen, Sachalin, Korea und den Liukiu-Inseln. Würzburg und Leipzig: Leo Woerl; 1897. p. 81–82．フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト．日本．斉藤信，金本正之訳．東京：雄松堂書店；1979. 6: 378

50）フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト．『日本』第六巻，378頁，斉藤信・金本正之訳．東京：雄松堂書店；1979. 6: 378

51）Dabry P. La médecine chez les Chinois. Paris: Henri Plon. 1863

Siebold and Ishizaka Sotetsu’s Contribution to the Reception of Acupuncture in Nineteenth Century Europe: A Comparative Research Based on the Acupuncture Manuscripts in the Siebold Collection

Vigouroux MATHIAS, Senjuro MACHI

Nishogakusha University

This article examines Siebold and his relations with the Tokugawa shogunate acupuncture doctor Ishizaka Sotetsu, based on both Western and Japanese primary sources. It is well known that Siebold’s contribution to a better understanding of Oriental medicine in Europe was limited to his interest in Japanese acupuncture, particularly Ishizaka Sotetsu’s acupuncture. However, past research on this subject has only relied either on documents written in Dutch by Siebold’s disciples or on Ishizaka Sotetsu’s writings on acupuncture, therefore making it impossible to match the Dutch translations with the original Japanese manuscripts. This article brings new insights in Siebold’s study on Ishizaka’s acupuncture, investigating from a comparative point of view documents held by Leiden University, Leiden National Museum of Ethnology, Ruhr-Universität Bochum, Toyo Bunko Library and the Ishizaka family’s collection. The second part of the article analyzes also how Siebold’s interest in Ishizaka Sotetsu's acupuncture differs from Rhyne’s and Kaempfer's interest in Japanese acupuncture

Key words: Acupuncture, Leiden, Siebold, Ishizaka Sotetsu, Chiyo ichigen